■■■　『難民受け入れ経験から問い直すべき日本の難民支援の形』　■■■

2015年ほど、『難民』という言葉が身近になった年は、近年みられないだろう。アフリカや中東での内戦から逃れるため、大勢の難民が粗末な小さな船で地中海をわたり南ヨーロッパにたどり着く姿をテレビや新聞で目にするたびに、これが同じ世界で起きていることかと目を疑った。地中海を渡ろうとして命を落とした難民や難民の子どもたち、国境を目指して徒歩で線路を歩く人たちの姿を見るたびに心を痛め、この豊かな日本ができることがないのかと、半ば憤る思いでニュースを見ていた人も少なくないだろう。

日本政府は、シリアとイラクの難民・国内避難民に向けて、昨年の実績の3倍にあたる約970億円の支援、そして難民を生み出す中東、アフリカ地域の平和構築のために、約898億円の支援を準備すると表明した。ヨーロッパ諸国だけでなく、アメリカ、オーストラリアなどが難民受け入れを表明する中で、日本は資金援助のみなのかと批判する声もあるが、これまでの日本の難民受け入れ経緯や難民が直面した厳しさを考えると大きな疑問は湧かない。私はむしろ、まだ日本は対外的な経済的支援しかできないのではないかと考えている。それは、約30年前にさかのぼるインドシナ難民受け入れ経験と現在の定住状況を考慮してのことである。

実は、2015年はベトナム戦争が終結して40年が経過した節目の年でもある。しかしながら、兵庫県がかつてインドシナ難民を受け入れていたことを知る人は多くない。まさに現在、地中海を小船で渡ってヨーロッパを目指す難民のように、ベトナムから日本に流れ着いたボートピープルを受け入れていたのである。極端な共産化から逃れて出国したインドシナ難民を受け入れる定住促進センターが設置されたのは、全国でも神奈川県大和市と兵庫県姫路市の2か所だけであった。姫路定住促進センターは、中心地から約30分離れた病院の土地で、1979年～1996年まで設置され、400人以上のラオス難民、2,200人以上のベトナム難民に３か月（後に4ヶ月）間、日本語指導、職業訓練・斡旋を行ってきた歴史がある。そのため、現在姫路周辺には定住難民の家族や呼び寄せ家族が2,000人以上定住している。

私は主にラオス定住難民コミュニティと関わりを持って活動をしているが、彼らの生活はまだ厳しい。もちろん日本語を習得し、定職を持つ者もいるが、当時、教育機関や地域での受け入れ基盤が弱かったこともあり、難民の子どもたちの多くが教育機会を享受できなかった。特に日本語の難しさや高校入試の厳しさゆえ、義務教育で教育をあきらめ、非正規労働者として地域の工場で働くことになったケースが多く、今は親になった難民の子どもが自分の子どもの教育や進路に悩んでいる。

難民を受け入れることになった場合、子どもの日本語指導、通訳の配置、学習指導、母語教育、居場所づくりなどが必要であるし、成人に対しては就労機会の確保、経済的支援、社会的偏見の排除など、体制を万全に整えることが必要である。私は当然、日本もヨーロッパ諸国同様に難民を受け入れるべきだと思うが、まずは意識改革から始めなければならない。

私が1990年代に米国で教員として働いていた時、毎週のようにベトナム、ラオス、カンボジアからの難民が地域に増えていた。それに対して教会、行政、学校、地域ボランティアは、英語や母語など言葉に対する支援からフードクーポンの配布まで連携して取り組んでいた。支援は数か月に留まらず、継続的に行われており、ほとんどの難民の子どもが地元の高校に進学していたことが印象的であった。現在、ドイツでは『難民学級』が学校にあり、ドイツ語を初歩から教えた

り、心のケアにあたっているというが、アメリカでもドイツでも地域で難民を育てていくという高い意識には頭が下がる思いである。
もちろん移民で成り立っている米国と日本では難民の受け入れ意識や体制づくりは異なるし、移民を国づくりに貢献する人材としてポジティブに捉えているドイツとも状況を異にする。しかし、日本は経済大国として、同じ世界の違う場所で命からがら祖国を逃れようとしている人や命を落としている人が増えている現実と真摯に向き合わなければならない。そのためには、インドシナ難民の受け入れ経験を問い直し、他国から学ぶべきことを整理しながら、前向きな受け入れ体制を確立していくべきだと思う。（兵庫県立大学教員　乾 美紀）

■■■ＫＦＣ日本語プロジェクト■■■

◆コラージュ発表会

9月13日、日曜クラス終了後、コラージュ発表会がありました。この形式は伝えたい事柄に関係のある写真や地図、雑誌の切り抜きなどを準備し、発表へつなげていくものです。当日の発表者は次の方々でした。
まず、ベトナムの男性は「国で食べるハーブの紹介」。実物持参の発表でした。家で育てているハーブも机の上に並び、回してもらったので参加者は香りもかぐことが出来ました。特にドクダミを香菜の一つとしてレタスなどと一緒にサラダとして食べるという話に驚きました。
次は、中国からお母さんと娘さん（６年生）による「ハルビンの紹介」。ハルビンの位置や特産物、有名な氷祭りの印刷物を模造紙にはり、それぞれ説明がありました。氷の祭典は規模も大きく世界中から観光客が訪れるお祭りであることを知りました。また中国東北部の冬の寒さについて質問も出ました。
最後、スリランカの男性は「国の名勝と象祭り」。世界遺産ともなっている仏教遺跡やキンキラに飾られた象の隊列の写真が用意されていました。発表者は７月に日本へ来た方ですので日本語学習は始まったばかりです。この日は支援者と共に前に立ち、サポートを受けながら発表しました。

＜日本文化体験「書道」＞

発表ごとの質問コーナーでは、言葉だけでなく視覚的にとらえられるものがあるので参加者も質問しやすい雰囲気でした。コラージュ発表会とはどんなものなのだろうと初めて参加したのですが、発表者と参加者が共にその場を共有しながら、日本語を話したり聞いたりする堅苦しくない発表スタイルであることを知りました。日本語レベルはいろいろでも、準備物があるので伝えやすいよう
です。様々な国の学習者が勉強しているＫＦＣ日本語クラスです。知らないお話がまだまだ聞けそうです。（宇野 祐子）

◆日本文化体験「書道」（9月29日）

9月の最終火曜日にKFCの教室スペースにて「書道体験」が開かれました。この日にむけて前回のグループレッスンで道具の名前、合ことば（足はぴた→せなかはぴん→おなかとせなかにぐう一つ→持ち方たしかめさあ書こう）などを学習しました。すずり、ぼくじゅう、ぶんちん、半紙など学習者にとって聞きなれない名前を実物を見ながら熱心に聞いていました。当日はまず筆の持ち方を練習し、筆の穂をおろした後いろいろな線をはじめ、「日」「川」「人」の字を練習し、各自一字を作品として仕上げました。最後にみんなで力作を手に持ち写真をパチリ！学習者の感想は「初めての書道は緊張したけど少し書けるようになって楽しかった。家に半紙があるので時

間があればやってみたい、とのことでした。支援者にとっても久しぶりに筆で書く文化に触れた有意義な一日でした。（西田 英代）

◆10月11日（日）料理交流会

今回は子どもさんの参加が多く、総勢33名の内14名が小学生以下の子どもでした。

イクメンで名高いベトナム人男性は娘さん2人とサラダを持参しての参加でした。　学習の時には写真を見せてもらったり、話もよく聞いていますが、お子さんと支援者は初顔合わせです。なんて可愛い、なんてヤンチャな・・・、まさに元気いっぱいです。キッチンで料理をしている間も、かるたや輪投げで楽しく遊びました。

男性陣は水餃子作りにいそしみました。しっかり料理をして、いっぱい食べて、遊びました。

朝からずっと賑やかでした。おいしいものはおいしい！おなかがいっぱいでご機嫌！と国籍、性別、世代に関係なく交流できた会になりました。とりわけ嬉しかったのは、　参加者の方が小学校の交換日記帳にこの日のことを書いてくれたということです。

以下、原文のまま引用します。

「日曜日、しん長田に行きました。お母さんは外国人に日本語をおしえていて、いっしょに教えている人に　さそわれたそうです。しんながたのビルで日本語教室のなかまでごはんを食べました。

タンザニアや中国などのりょうりで外国のりょうりでした。水ぎょうざがとてもおいしかったです。

ほかにもヒヨコ豆のカレーやエビせんべい、サラダなどがありました。すべてとてもおいしかったです。

ほかにもたくさんゲームをしました。とても楽しかったです。」　　（熊野 真衣）

■■■ＫＦＣ外国にルーツを持つ子どもの学習支援■■■

◆ 子どもたちが増えた　はいず（賀川記念館）

今年で3年目を迎えた三宮の賀川記念館での外国人の子どもたちの放課後学習支援教室「はいず」ですが、夏ごろから中国人の子どもたちが増え、子ども12人大人１人、ボランティアは９人になりました。お父さんの一人は、「入管法が変わったので家族を呼び寄せた」と言われました。今までは、中国の家族のもとに子どもを残して日本で働いていた、というのです。親子が一緒に暮らせるのはうれしいことです。

子どもたちは、突然日本にやってくるので、全く日本語はわからず、お父さんお母さんに言われて、日本語の本を見て、「あいうえお」を覚えようとする、あとは学校で数時間外国人支援の先生についてもらったり、取り出しの日本語の学習をしてもらったりしながら学校に慣れ、日本の生活になじんでいくことになります。どの子も初めはなかなか言葉がわからず、支援の先生がいる時間以外は、学習することもそこに座っていることも大変です。「ネットで見つけたので」とはいずの見学を申し込まれるのですが、見学に来て、何よりも中国人留学生のボランティアの方の声かけにほっとされたようです。子どもたちも、同じ様子で、参加を決めたようです。

しかし、子どもたちは、学校での子ども同士のつながりや先生方の取組みの中で、驚くほど早く日常生活に必要な日本語を習得していきます。１・２か月すると、一見「大丈夫」と思えるようになります。もちろん、どの子も一生懸命日本語を理解しようとしています。

はいずなどでの学習時間が生きるのはこのあたりからかもしれません。「算数は、きちんと黒板に書いてもらったら、だいたいわかる」「中国のほうが進んでいる」と言いますが、文章題で聞かれていることの理解や、新しい単元にはてこずります。漢字が読めるのですが、国語や社会

は「苦手」という声が多いです。言葉や事柄など、絵や地図など使い説明するようにしています。
留学生の皆さんが活躍するのは、算数や理科の中国語での説明です。また、「子どもの日本語」を使って学習していますが、場面の説明、言い換えの練習など、とても丁寧にしてくださいます。つまづく所がよくわかるようです。また、中国語で学校の様子を話し合ったりしています。中国語が飛び交う中ですごすほっとする居場所になっているのでしょうか。何人か日本語指導をされてきたボランティアの方がいらっしゃるのも助かります。もう少したつと、日本語で話すのが楽しくなるようなので、話をよく聞いて教えていただければ、日本の子どもたちの学習支援とあまり変わらなくなります。
開設当初から来ている二人も含め、1対１でないと学習が進まない、という中で、課題の一番はボランティアスタッフの確保です。時間帯が４時から５時半というのは都合がつきにくいのですが、支援してくださる方を待っています。　（小城 智子）

◆ベトナム・デイに参加して

神戸市は昔から定住外国人が多い地域ですが、その内訳としてベトナム人が多いというのが他市にない特徴のようです。日本全体でみると在日外国人の上位3か国は、中国、韓国・朝鮮、フィリピンとなるのが、兵庫県では上位3番目はベトナムになります。また県内の定住ベトナム人のうち、3分の1が神戸市に、その半数が長田区に住んでいます。数年前から在日外国人のための健康相談事業に関わってきましたが、この統計については最近知りました。昨年2月まで関東方面で働いており、そこで参加していた健康相談事業に来られる方の多くはフィリピン、ブラジル出身でしたので、ここ神戸でKFCに参加させていただくようになり、ベトナムの方とお会いする機会が増え、この数字を実感するようになりました。

ベトナム・デイにはこの6月から参加させていただいています。毎回15人前後の方がデイを利用されています。参加して最初に感じたのは、男女比が同じくらいで男性が多いということです。日本人対象の地域活動では、男性の方の参加がだいたい1割くらいですので、そのような光景に慣れていると違いを感じます。デイでは男性はドミノ、女性はおしゃべりをして過ごされています。皆で輪になって行う体操も和気あいあいとしており、非常に雰囲気がよいです。ベトナム語は全くしゃべれませんが、この場所にいるだけでも楽しい気分になります。

デイに参加するきっかけは、今年度から行っている研究でKFCにご協力いただくようになったためです。在日外国人の高齢化率はこの20年で2倍に増えていますが、在日高齢者を対象とした地域の保健事業については、ほとんど議論されていません。在日の高齢者が、地域で可能な限り健康で自立して生活していくにはどのような支援があればいいのか、という課題で研究を行っています。まだ調査途中ですので分析にまで至っていませんが、これまでご協力いただいた方の話から共通していえるのは、地域の保健福祉資源について知られていないこと、また介護が必要になったときに過ごしたい場所については「わからない」と回答される方が多いことです。

15年前オーストラリアで地域看護の研修に参加していた時、看護サービスを受ける方は様々な国籍出身で、中には英語を話せない方もいました。またつい先日行われた学術集会で、外国人高齢者の認知症ケアをどのように行うか、当事者家族を含めた取り組みをオーストラリアでは地域看護師が中心に進めている話を聞きました。移民政策が確立している国だからともいえますが、日本でも在日外国人が日本人と同様に保健医療サービスを利用しやすい環境になればと思います。微力ながら自分が何か貢献できればと思います。そして10年前に買ったきりのベトナム語の本をさっさと勉強して、デイに来られている方とコミュニケーションを少しでもとれるようにがんばります。　（神戸市看護大学　相原 洋子）

■■■ KFC中国帰国者支援事業 ■■■

◆敬老の日

9月21日（月）に毎年恒例の敬老の日を迎えました。そして、翌日22日（火）にKFCは料理のイベントを開催しました。

今、日本には65歳以上の人が約3000万人います。少子高齢化社会が続くと、2050年まで日本の将来が大変です。老化の社会です。これは日本政府にとって最も重要な課題です。

金理事長と呼和さんはいろんなことを配慮して、75歳以上の人にまたお祝いのプレゼントを差し上げました。感謝の気持ちと言葉がいっぱいです。

料理の担当者は朝早く来て、中国家庭の伝統料理――春餅を作りました。また、胡瓜と豚の頭肉、耳肉を調味料で混ぜるサラダ、ジャガイモの千切りとにらの炒め、もやし炒めもありました。卵とわかめのスープが美味しかったので人気でした。私も２回お代わりして飲みました。参加者の人数が多いのでできた料理が２階から１階に運ばれました。すべて手作業なので大変でしたね。

みんな一緒に乾杯してから、食べたり、喋ったり、嬉しかったです。やはり故郷の懐かしい味かな……。

KFCの方たちとお料理を作った人たちはお疲れ様でした。本当にありがとうございました。

（石垣 深波絵）

◆映画鑑賞会「あの子を探して」

『あの子を探して』はとても感動的な映画でした。貧しい村に、魏敏芝という代理の先生がいます。彼女は、母親の看病でやむを得ず学校を一か月休む元教員と、一人の子どもも脱落させないと約束しました。しかし、子どもの一人が家族の事情で学校をやめて出稼ぎに行ってしまいました。そして、魏敏芝が他の子どもと一緒に大変苦労しながら出稼ぎにでかけた子を探すというストーリでした。

映画で描かれた魏さんの強い決意、持続力、忍耐力などは模範とすべきものでした。魏さんの優しい気持ちが天も感動させたことで、局長の協力を得られることができ、先生と子どもが村まで送ってもらえただけでなく、たくさんの文房具を村に持って帰ることもできました。魏さんの行いは村の人々も感動させました。脱落した子どもはまた村に戻って勉強できるようになりました。

皆に平等に教育を受ける権利があることが『あの子を探して』という映画の主題でしょう。これも人間として苦労を惜しまず擁護すべきことです。現在、KFCの日本語教室で勉強できて楽しみと幸せをいっぱい感じています。この映画はなかなか忘れられない映画です。

今後もKFCの日本語教室と交流活動で頑張ります。（宋 淑 琴）

■■■　グループホーム・小規模多機能型居宅介護ハナ■■■

◆介護福祉士実務者研修に参加して

僕は今、介護福祉士実務者研修に参加しています。７月から自宅学習が始まり９月から通学学習を受けています。先日、通学学習も半分終えることが出来ましたが、現時点で学んだことは「利用者さん主体」の声かけと動作です。できる限り利用者さんにとって前向きになれ安心して頂けるような声かけをしていかなければならないなと思いました。実際「介護」という仕事に就き、１年が過ぎましたが動作と声かけを同時にはなかなかできていないなと思います。オムツ交換の

際にも換えることだけに必死になり、換えながらの会話がほとんどありませんでしたので、これからは声かけ・コミュニケーションにも気をつけていこうと思います。その他にも現場とのギャップに驚きました。現場で行っているケア、普段行っていること、今まで正しいと思い行っていたことが利用者さんのためには行えていないことがたくさんあったんだなと知ることもありました。先生には、現場で忘れていた介護の基本的な理念を教えて頂き、自分自身、自分のしたい介護へ繋がりました。その他、僕は自分の身体を全く守らず介護を行っており、腰や肩などにかかる負担のことなどほとんど考えていませんでした。ですが今回の受講で身体を守る介護がどれだけ大事なのか実際に教えて頂きました。研修に行くことによって初心に戻りもう一度一つ一つ思い出して行かなければならないこと、もっと多くの知識を身につけていこうと思いました。後半には、医療的ケアのことも学ぶので積極的に参加していきたいと思います。
そして他の施設で行っていることなどを聞き意見の出し合いが出来ればもっと介護の視野が広がっていくと思います。（木村 翔悟）

■■■ ハナの会■■■

◆健康を考えて楽しむ敬老会

9月15日（火）、16日（水）に敬老会をしました。敬老会といえども身体をいたわるのではなく、一人一人の能力にあわせて楽しみながら身体と頭を使うことをしました。
昼食は、調理の朴がキンパ・いなり寿司・焼肉・サラダ・フルーツ飾り盛りなど豪華でとても美味しい料理をたくさん用意し、みなさん、たくさん召し上がりました。
理事長の挨拶により敬老会スタートです。
まず山下まゆみさんによる歌です。いつもながらお上手で綺麗な歌声です。みんなリラックスしてきて、踊りも楽しみました。歌が一息つくとゲームがスタートしました。
一つ目のゲームは、「今日のメニューは？」です。これはまず、カレー、ちらし寿司、ビビンバ、ちらし寿司、チャプチェ、キムチのそれぞれの具材の写真を床に並べます。４名一組で　例えばカレーならじゃがいも、にんじん、玉ねぎ、カレールー、肉などを探して釣竿で釣り上げるといったものです。単純なゲームですが、うまくつりあげられずみんな苦労していましたが、楽しまれました。
次のゲームは「輪くぐり」です。新聞で丸めて作った輪を足→胴体→頭とくぐらせて、次の人にまわす、これをチームで対戦します。みんな勝ち負けに必死です。何回か繰り返して、足→胴体→頭の次に頭→胴体→足と反対にして動かすと違った動作になり、普段動かさない身体や筋肉を使います。オモニやハルモニたちが声をかけ合い助け合い最後に理事長も加わりかなりみんなヒートアップしました。みんなで一つの事をやり遂げることでみんなの連帯感も生まれ楽しく健康的になれた敬老会だと思います。
昼食前のスクワットも続けています。個人の体力、筋力の違いありますので、できる範囲で、との声かけで本人にまかせています。これからは体力筋力もどんどん落ちていくので、イベントの際は身体を少しでも動かしていける事を考えていこうと思います。（竹宮 章子）

■■■ 今後の予定■■■

■日本語プロジェクト研修会

11月29日(日)　遠足「嵐山」
12月8日(火）11：00～「三味線を聞こう」
於　KFC教室スペース

■KFC新長田交流会

11月24日（火）　映画鑑賞会

12月20日（日）　カラオケ

■ベトナムデイ

11月19日(木)　奈良遠足